# 第 25 回全国大会　「理論フォーラム」企画趣意書

【タイトル】
「（論争）内部化 VS 外部化：企業の国際提携を説明する有効な理論とは？」

【第 1 部】立論　20 分
　伊田昌弘（阪南大学）「外部化からのチャレンジ」10 分
　長谷川信次（早稲田大学）「内部化理論の拡張」10 分

【第 2 部】コメントと討論（質疑応答）30 分
　大木清弘（東京大学）のコメントと質問 10 分
　藤澤武史（関西学院大学）のコメントと質問 10 分
　質疑応答 10 分

【第 3 部】一般討論（質疑応答）35 分

司会　上野正樹（南山大学）

【趣意】
　企業間提携（アライアンス）は、必ずしも新しい現象ではなく、すでに 1920 年代にはその原型がみられる（Telesio 1979）。しかしながら、80 年代後半以降、企業の国際化が規模においても業種においても圧倒的な大きさと広がりをもつようになると、これを巡って多くの研究がなされるようになってきた。
　かつて長谷川（1998）は、上記を包括した上で、提携を「あらたな取引原理」として把握し、それを明示的に導入することで、伝統的な内部化理論からの拡張、普遍化を試みた。また、ほぼ同じ頃、藤澤（2000）は、 何故企業が海外進出するのかという、いわゆる決定因研究から始まり、どのように海外進出するのか、「参入モード」の研究において、90 年代に内部化理論への批判が大きくなっても、それに代わる理論が登場しなかったという理由から、独自の内部化理論再構築を試みている。これが本フォーラムの出発点である。
　21 世紀に入り、企業の効率化を求めるために「ダウンサイズイング」や「アウトソーシング」といった、当該企業にとってのいわば「外部資源」を積極的に利用する現象が頻繁に発生してきた。加えて、ICT の発展によって、ボーングローバル企業や急速に巨大化する多国籍企業が注目を受け、その多くが国際提携を行っている。さらに「オープンソース」といった経営手法の研究も進んでいる。

2000 年以降、「外部資源」活用派の潮流としては、グローバルバリューチェーン（国際分業のタイプ分類: Gereffi, Humphrey, & Sturgeon 2005）、プラットフォームリーダーシップ論（Gawer &Cusumano 2002））、ビジネスエコシステム論（Iansiti & Levien, 2004; Adner & Kapoor, 2010; 立本,2011））、水平分業論（Aizenman & Marion 2004）、長期継続的取引関係（関係特殊技能、自動車サプライヤマネジメント）、NIH シンドローム（Carter 2006）などが挙げられる。これらは、今日、どう理論的に把握すべきなのであろうか。

ところで、内部化に関わる理論的源流は、Coase（1937）や Williamson（1975）の「取引費用学説」にまで遡る。以後の論者は、「市場の不確実性」や「市場の失敗」から「市場の不信」が大きな特徴となって、「取引コスト」を削減するために「企業組織の拡大」と「内部化された市場」によって多国籍企業の存在理由と行動原理を説明してきた。しかしながら、安室（2009）が主張するように組織の肥大化は、「組織の失敗」ともいうべき「(内部化・隠ぺい化されるが故に）企業犯罪」を時々発生させる。この場合の「不効率」は取り返しのつかない程、大きくなる。かつて、市場原理に基づき最適な国際分業を主張した小島（1982）が、内部化による国際ビジネスアプローチを取るレディング学派に対して「独占の擁護理論」として喝破したことを想起させる。

そこで、こうした「外部化からのチャレンジ」ともいえる多くの現象と、市場を巡る「不信」VS「信頼」といった大きく分かれる２つの見解から、国際ビジネスの理論（特に提携に関する理論）はいったいどうあるべきなのであろうか。市場は信頼できるのか否か、「内部化理論」の放棄か拡張か、本フォーラムでは、現代（2018 年）の時点に立ち、この問題を扱い、真に有効な理論とは何かを巡って議論する。また、フロアからの議論時間を多く取って、有意義なものにする予定である。多くの参加者を期待したい。


(1) Aizenman J. and N. Marion (2004) “The Merits of Horizontal versus Vertical FDI in the Presence of Uncertainty,” Journal of International Economics, Vol.62, pp. 125-148.

(2) Adner, R. & Kappor, R. (2010). Value creation in innovation ecosystem: How the structure of technological interdependence affects firm performance in new technology generations. Strategic Management Journal, 31 (3)

(3) Carter, B. Desperate Networks, New York: Doubleday, 2006. pp. 130-131

(4) Coase, R. H.（1937）, “The Nature of the Firm,” Economica, New Series, Vol. 4, No. 16. (Nov., 1937), pp. 386-405.

(5) Gawer A. & M. A. Cusumano（2002）, Platform Leadership,Harvard Business School Press.(小林敏男監訳『プラットフォーム・リーダーシップ―イノベーションを導く新しい経営戦略』有斐閣 2005)

(6) Gereffi, G., Humphrey, J. and Sturgeon, T. (2005) “The Governance of Global Vlaue Chains.” Review of International Political Economy,12(1), pp.78-104

(7) Iansiti, M. & Leivien, R. (2004). The keystone advantage: What the new dynamics of business ecosystems mean for strategy, innovation, and sustainability. Harvard Business School Press. (杉本幸太郎訳 『キーストーン戦略』 翔泳社, 2007).
(8) Kojima, K. (1982) “Macroeconomic versus International Business Approach to Direct Foreign Investment” Hitotsubashi Journal of Economics No.23 1-19
(9) Telesio, Piero (1979) ,Technology Licensing and Multinational Enterprises, N.Y. Pracger.
(10) Williamson, O. E.（1975）, Markets and Hierarchies, The Free Press. (浅沼萬里，岩崎晃訳『市場と企業組織』日本評論社 1980).
(11) 立本博文 (2011). 「オープン・イノベーションとビジネス・エコシステム： 新しい企業共同の台頭とプラットフォームビジネスの誕生」 『組織科学』 45 (2), 60-73.
(12) 長谷川信次（1998）「多国籍企業の内部化理論と戦略提携」同文館
(13) 藤澤武史（2000）「多国籍企業の市場参入行動」文眞堂
(14) 安室憲一（2009）「内部化理論」の限界有効性」立教ビジネスレビュー　第 2 号 9-17